



There 存在文の特徴描写機能について

南, 佑亮

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 62:37-60

(Issue Date)

2024-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491836>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491836>



There 存在文の特徴描写機能について

南 佑 亮

1. はじめに

英語の there 存在文 (*there*-existentials, 以下 TE) には、(1) のような特異な構造的特徴がある。まず、英語の典型的な文構造における主語の位置（動詞の前）を、具体的な概念内容を表さない文法的要素 *there* が占める。それに *be* 動詞が後続し、動詞の直後という、典型的には目的語が来るべき位置に具体的な概念内容の伴う名詞句が来る。最後に前置詞句（典型的には場所 (location) を表す）が随意的に伴う。本稿では、慣例に倣い (McNally 2011 等)、*be* 動詞後の名詞句を *pivot*、最後の前置詞句を *coda* と呼ぶことにする。

(1) [*there* BE NP_{pivot} (PP_{coda})]

(2) There are apples in the kitchen.

(3) There has been a car accident.

TE が伝達する意味概念は、その名の通り、何かの「存在」に関するものだが、*pivot* 指示物の存在そのものの描写のためだけにこの構文が用いられることは稀であり、ほとんどの場合、何かしらの存在物 (entity) が特定の時空間内に位置すること（または、そうでないこと）を描写する。(2) では、キッチンという場所にリンゴという個体が存在するという状況を描写し、(3) では個体と捉えられた自動車事故という出来事が、（おそらく最近、近所で）起こったという事実を描写している。

TE が持つ情報構造上の性質については多くの研究の蓄積がある。最もよく知られるのは、*pivot* が定 (definite) の名詞句であってはならないという、定性効果 (definiteness effect) である (Milsark 1974, Rando and Napoli 1978, Abbott 1993, Birner and Ward 1998 等)。定性効果については、例外的な現

象も含め、様々な立場からの記述と説明が試みられてきた。他方、TE が構文として談話の中で担う機能については、概して TE が提示的機能 (presentational function) を担うことができるという点は見解が一致している。Lambrecht (1994) をはじめとする多くの研究によれば、英語の TE は (4) の特徴を示す。

(4) a. pivot の指示対象 (referent) を談話 (discourse) 内に新たに導入する。

b. TE によって導入された指示対象は潜在的に高いトピック持続性 (topic persistence) (Givón 1983) を示し、後続文脈のトピックとなりやすい。

(4) の 2 つの性質は、定性効果とも関係がある。まず、pivot が不定 (indefinite) であることは (4a) の機能が成り立つための前提条件である。もし pivot が定 (definite) になると聞き手にとって既知 (given) である指示対象を表すことになるため、(4a) は成立し得ない。さらに (4b) は、(4a) の成立を前提条件として成り立っている。ある指示対象を新しいトピックとして導入するためには、導入される時点でその指示対象は未知のものでなくてはならないからである。もし既知の指示対象なら、それは there 存在文が使用される前にすでにトピックの地位にあったことを意味し、新たなトピックになることはない。

以上の性質を全て兼ね備えた TE の例は、次のようなものである。

(5) Once upon a time there was an old king who lived in a beautiful castle.
(Lambrecht 1994: 129)

(5) における TE (=there was an old king) の pivot は不定 (indefinite) であり、この pivot が指す指示対象である個体 (=an old king) を新たに談話に導入している。導入された個体は、TE の直後の文脈 (例文 (5) の場合は関係節) でトピックとして機能し、関係節内の叙述 (=lived in a beautiful castle) の対象となっている。そして、おそらく高い確率でこの後のコンテキストでもこの個体はトピックとしての地位を保持していく。本稿ではこのような提示的機能を持つタイプ

の TE を便宜的に「提示的 TE」と呼ぶ。冒頭に挙げた (2) や (3) も、(5) のような後続文脈の情報はないが、(5) と同じように提示的 TE として用いることは可能であり、それに応じた後続文脈の想定は容易である。

しかし、すべての TE が提示的 TE (=提示的機能を担う) というわけではなく、他の機能を担うタイプの TE が複数存在する。その中でも、本稿は (6) のような TE に注目する。

- (6) a. There is no substance to his claims. (Lakoff 1987: 559)
 b. There is a depth in her voice. (金口 1968: 50)
 c. He was whistling quietly to himself and there was a curious, empty quality to his face. He was no longer wearing his tinted glasses and (…). (*The Word is Murder*; 下線は筆者による)

(6) の 3 つの TE の機能は pivot の指示対象を談話に導入することではなく、むしろ coda の補部にあたる名詞句 (以下、coda NP) の特徴を描写することである。本稿ではこの機能を「特徴描写機能」と呼ぶ。これに加え、(6) の各例は、(2) (3) とは異なり、そもそも (4a) の提示機能を示す可能性がないと考えられる。もしそうだとすれば、pivot の指示対象が後続文脈でトピックになるという (4c) の特徴も (6) には該当しないことが予測できるが、(6c) の実例はこの直観を支持している。(6c) における TE の直後の文脈でトピックとなっているのはこの TE の pivot (=a curious, empty quality) ではなく、先行する節 (=He was whistling quietly to himself) の時点で既に談話トピックとして確立している人物 (=he) である。したがってこの TE の pivot はトピック持続性を示さない。それだけではなく、TE を構成する要素でいえば、pivot ではなくむしろ coda 内の補部 NP (=his face) が先行文脈と間接照応の関係で結びつけられており、先行文脈で確立している談話トピックの持続に貢献している。このようなタイプの TE を、本稿では、特徴描写機能を持つ TE (以降、「特徴描写 TE」) と呼ぶ。

2 節で詳しく見るように、特徴描写 TE は、TE が本質的に提示機能を担う構文形式であるとする分析 (Lambrecht 1994, 2000) にとって問題となる現象で

ある。これに対し本稿では、この問題が、TEに先行する文脈を分析の射程に入れることで解消されることを示す。具体的には、文脈を含めたTEの事例観察を通して、先行文脈で確立した談話トピックの特徴描写に貢献するという機能は特徴描写TEに限らずその他のTEでも見られることを指摘し、この機能の特徴は、Lambrechtの提示した判断の類型に基づく分析を文レベルではなく談話レベルに拡張して適用することではじめて分析が可能になることを論じる。

本論文の構成は次の通りである。2節では、特徴描写TEが、判断の類型と情報構造（焦点構造）に基づく文レベルでのTEの分析（Lambrecht 1994, 2000）では説明がつかない現象であることを指摘する。3節では、TEと先行文脈との関係に着目した先行研究を足掛かりとし、まず先行文脈を含めた特徴描写TEの実例観察を通して、特徴描写TE全体が先行する談話トピックについての特徴描写の一部となりうることを見る。続けて、pivotが個体を指すタイプのTEについても談話トピックの特徴を描写する機能が共通して観察されることを示す。最後にこれらの事実は、Lambrecht理論における判断の類型を文レベルではなく談話レベルにも適用することで説明できることを論じる。4節は結語である。

2. 先行研究—文レベルの情報構造分析の限界

Lambrecht (1994, 2000) は、英語のTEは、単純判断 (thetic judgment) を反映した文（以下、thetic文）の一種と分析する。それによれば、thetic文は、複合的判断 (categorical judgment) を反映した、英語の文構造としてはより典型的な地位にある主語述語 (subject-predicate) 構造の文（以下、categorical文）とパラダイムの対立 (paradigmatic contrast) の関係にある。以下、理論的背景も踏まえながら、この分析の詳細を述べる。

単純判断 (thetic judgment) と複合判断 (categorical judgment) の区別は、哲学者 Franz Brentano や Anton Marty によって、人間の判断の基本的な2つの類型として議論された概念である。Kuroda (1972) は、この概念を言語学的分析に取り入れた最初の試みである。Kurodaの特筆すべき貢献は、日本語の「は」「が」標示の使い分けが2つの判断の類型を反映しているという事実を指

摘し、言語研究において、複合判断を反映する主語―述語構造を持つ文（以下、categorical 文）だけではなく単純判断を表す文である *thetic* 文も分析対象とすることの重要性に光を当てたことである。Sasse (1987) は、Kuroda (1972) の立場を踏襲し、他言語においても様々な形式的な方略を用いて 2 つの判断を表す表現形式が区別されていることを示した。この流れを踏まえ、Lambrecht (1994, 2000) は情報構造 (information structure) の観点から *thetic* 文と categorical 文の体系的な特徴付けを試みた。Lambrecht の提案する文法体系では、典型的な categorical 文はトピック (topic) と焦点 (focus) から成り、それぞれ主語と述語で表現される。この時、典型的には、まず主語が対象を表し、述語がその対象に関する属性 (property) について述べる。これに対し、*thetic* 文はトピックとしての機能を担う主語が欠落しているという特徴を持つ。*thetic* 文は同一言語内にも複数の種類が存在するが、そのいずれもが categorical 文の形式からは何らかの形で逸脱した形式を有するという点で共通している。形式の逸脱は音韻や形態のレベルでなされる場合もあるが、英語の *thetic* 文の一つである TE の場合は統語的な方略による逸脱が伴う。具体的には、categorical 文であれば文のトピックとなる主語が来る位置（動詞の前）に *there* という虚辞 (*expletive*) を置き、categorical 文での主語に対応する名詞句を動詞の後という焦点位置に置いている。したがって TE は文全体が焦点となる焦点構造（Lambrecht の理論では Sentence Focus=SF）を持ち、トピックと焦点から成る焦点構造（同理論では Predicate Focus=PF）の categorical 文とはパラダイムの対立 (*paradigmatic contrast*) の関係にある。Lambrecht の理論内では命題内容を共有し情報構造が異なる文構造の集合（多くの場合は、ペア）を成す要素は“*allosentences*”と呼ばれる。したがって TE とそれに対応する categorical 文とは、互いに対立する *allosentences* の関係にある。

以上が Lambrecht による TE の分析の要諦だが、この分析は、以下のような例（物語・童話の冒頭部の作例）については上手く説明できる。

- (7) Once upon a time there was an old king who lived in a beautiful castle. [= (5)]

- (8) Once there was a wizard who was very wise and rich. (Lambrecht 1994: 180)

Lambrecht は、談話に指示対象を導入することが、存在文に備わった「基本的なコミュニケーション機能 (fundamental communicative function)」(Lambrecht 1994: 179) であると述べる。談話に新たに指示対象を導入するわけであるから、その指示対象は当然、トピックであってはならない。トピックになってしまうと、それは既知 (given) のものとして扱われてしまうため、談話に始めて導入された要素とはなり得ないからである。確かに、(7)(8) の例はいずれもこの条件を満たしている。

ただし、言うまでもなく TE は (7)(8) のようなものばかりではない。1 節でも例示したとおり、現実には (pivot の場所を表す) coda を伴うことが多く、しかもその coda NP は定 (definite) であることが好まれる (cf. Anderson 1971)。ここで、定名詞句を含むことが、「TE が SF 構造であり、文全体が焦点 (新情報) である」という特徴づけに矛盾しまいかという疑問が生じる。

実は Lambrecht もこの点に気付いており、そのようなタイプの TE であってもやはり *thetic* 文であることに変わりはないと論じている。

- (9) Thetic sentences may also contain locative topics, such as the prepositional phrase *in my soup* in the sentence *There were three FLIES in my soup*, whose topic status is expressed via lack of prominence (...). What counts for the definition of the formal category “thetic sentence” is that the constituent which would appear as the subject (or distinguished argument) NP in a corresponding categorical *allosentence* gets formally marked as a NON-TOPIC, resulting in a departure from the unmarked pragmatic articulation in which the subject is the topic and the predicate the comment. (Lambrecht 1994: 145)

(9) で Lambrecht が述べようとしていることは、次のように解釈できる。「TE は *thetic* 文だが、もちろん *thetic* 文が常にトピックを一切含まないというようなことはなく、現に TE では *coda NP* がトピックを表すこともある。しかし、この事実は TE を *thetic* 文とみなす分析には矛盾しない。(9) で挙げられている TE を例に取ると、*thetic* 文としての TE の特徴の本質は、対応する *categorical* 文 (= *Three flies were in my soup.*) において主語の位置でトピックとしての地位を担う名詞句 (= *three flies*) が、TE においては動詞の直後という（主語ではなく）目的語のための統語的位置にあるためにトピックとしての機能を持たない（焦点に含まれている）ことにある。この TE における場所句のトピック (= *in my soup*) は、*categorical* 文でもトピックになり得る要素ではあるものの、TE において主語位置を占めているわけではない（つまり述語の一部を成しているにすぎない）ため、TE の *thetic* 文としてのステータスに影響する要因とはならない。」

TE が一貫して *thetic* 文として提示的機能を担うという仮説を保持するという Lambrecht の方針は、(9) で挙げられた例文 (*There were three flies in my soup.*) に対しては確かに維持できるかもしれない。なぜなら、この文の機能は *coda NP* の指示対象 (*my soup*) の特徴描写ではなく、*coda NP* も描写対象の一部に含んだ状況全体の描写（そしておそらくそれに伴う非難）だからである。

ところが、これと同じ説明を (10) の各例に適用するのは困難である。

- (10) a. There is no substance to his claims.
 b. There is a depth in her voice.
 c. He was whistling quietly to himself and there was a curious, empty quality to his face. He was no longer wearing his tinted glasses and (…).

[(6) を再掲]

1 節でも述べた通り、*coda NP* は状況描写の一部を成すのではなく、*pivot* による特徴描写の対象となっている。つまり、*coda NP* がトピック（主語）で、

pivotが焦点(述語)として、PF構造で表現されてしかるべき意味構造を有している。現に(10)の各文とほぼ同じ内容は、動詞 have を用いた PF 構造の文で伝達することが可能である。

- (11) a. His claims have no substance (to them).
- b. Her voice has a depth (in it).
- c. His face had a curious, empty quality (to it).

Lambrecht の理論に基づくと、(11) の各文は PF 構造であるため問題ないが、(10) の方は「SF 構文の構造をしているが、PF 構造としての意味解釈がなされている」ということになる。ところが、これは理論上、不可能なことである。Lambrecht の焦点構造の体系では、PF が無標の形式であり、SF が有標の形式である。PF は無標の形式であるがゆえに、文脈によって他の焦点構造(たとえば SF)としての解釈を許容する場合があることは Lambrecht (1994: 303-305) で詳しく述べられているが、これは、有標の形式である SF が無標の形式で表されるべき PF の焦点解釈を許容するという逆向きの現象は生じ得ないということの意味する。したがって構造は SF でありながら PF のような解釈を受けるという(10)の TE は、この体系内では生じないはずの現象なのである。このように、TE を thetic 文とし、その構造上の特異性から無標の PF の文構造と対立する有標の SF 構造を表す構文現象であると見做す Lambrecht の説では、特徴描写 TE を上手く捉えることができない。

本稿では、この問題に陥る原因が、(暗黙の前提として) TE を文レベルだけで分析しようとしていることにあると考える。既に触れたように、TE には、pivot への定性効果とは対照的に、coda NP の方は定名詞句であることが多いという特徴がある (Anderson 1971)。事実、これまでの先行研究で例文として挙げられる TE の coda の名詞句はほぼすべてが定名詞句である。このことは、(Lambrecht 自身も (9) で暗に認めているように) TE は先行文脈と何らかの結びつきがあることが多いということの意味する。そして言うまでもなくこの性質は特徴描写 TE にも当てはまる (coda NP がトピックである以上、これは必

然的なことである)。以上のことから、「TE の構文としての意味機能を十分に明らかにするには、先行文脈も分析対象に含めなければならない」という作業仮説を立てることができる。次節では、この仮説に基づいた実例分析を通して特徴描写 TE とその他の TE との類似性を明らかにし、本分析の理論的な含意を議論する。

3. コンテキストに結びついた TE の機能

TE の解釈が文脈に依存する性質を示すということ自体は一部の先行研究で認識されてきた (Partee and Borschev 2004, Francez 2010, Irwin 2018 他)。ここでは、TE と、先行文脈との関係そのものを詳細に検討した研究である Francez (2010) の知見を確認しておく。

Francez (2010) は、coda を欠いた TE (以下、裸 TE) がコンテキスト依存性 (context dependence) を示すという事実を指摘する。具体的には、裸 TE の意味には場所を表す非顕在的項 (implicit location) が含まれ、その値が決定されるパターンとして、言語外のコンテキスト (直示的)、談話コンテキスト (照応的)、言語内的コンテキスト (束縛変項) の 3 つがあると述べる。本稿ではこのうち、照応的な性質を示す (12)(13) のようなタイプの TE に注目する。

(12) We had to leave the village. There was no more coffee.

(Francez 2010: 17)

(13) I hate this building. There are no windows.

(ibid.: 19)

(12)(13) において、照応関係によって場所を表す非顕在項の値の決定には複雑なプロセスが関わっている。(13) を例にとると、TE における非顕在項の値は、先行文脈において familiar な状態になった個体 a (this building) と関係 R (この場合は「部分全体関係」) で結ばれたものの集合 $(\lambda x.R(a, x))$ に絞り込まれる。これにより、(13) の TE で「窓が存在しない」と言っているのは、TE の直前で想起された建物の部分を成す要素の集合に限った形で解釈がなされる。インフォーマルに言い替えれば、(13) の TE は「窓というものが存在しない」とい

う（非現実的な）一般論を意図しているのではなく、「直前で言及した建物と関係 R にある存在物に関して言えば」という限定が付いたうえで適切に解釈されるということである¹。

ここで、(12)(13) のような照応性を示す裸 TE に関して、2 節で取り上げた Lambrecht の説との関係を検討する。裸 TE には coda もないため、一見すると 2 節で見た (7)(8) のような提示的 TE と同種のものに見えるが、実は全く異なる性質を示す。第一に、この TE は新たな指示物を談話に導入していない。(12)(13) の pivot の指示対象はそこに存在しないものであるため、後続文脈のトピックにはなり得ないからである²。そしてさらに重要な相違点は、この TE の解釈そのものが先行するコンテクストと切り離せない関係にあるということである。ところが同時に、この裸 TE は、動詞に先行する位置（つまり典型的な主語―述語構造の文における主語位置）にトピックを欠くという点では確かに thetic 文である。thetic 文は SF の焦点構造、すなわち文全体が焦点になるという特徴を示すが、確かに (12)(13) の TE は新しい情報を提示している。ただしそれが成り立つためには、直前の文脈で導入された指示対象 (=this building) との間接照応的な関係が欠かせないのもまた事実である。このように、TE が thetic 文で SF 構造を有するという一般化は保持できるにもかかわらず、(12)(13) の TE は明らかに提示的 TE とは異質なものである。

TE の分析に先行文脈を取り入れた Francez の洞察は優れたものである。ただし、不十分な点が 2 つある。第一に、coda を伴わない裸 TE しか対象にしていないため、coda が伴う場合にも同じようなことが当てはまるのかが分からない。第二に、TE の文の意味の中で照応性を伴う部分の指示対象の決定プロセスにのみ注目し、そのような TE が果たす談話上の機能自体には目を向けていない。このうち、本稿にとって重要なのは後者の方の問題である。(12)(13) の TE が提示機能を担わないことは前段落で述べた通りだが、では一体、この時の TE の文機能はどのようなものなのだろうか。以下ではこの点を念頭に置き、先行文脈を含めた TE の実例の検討を行う。尚、扱うデータはすべて小説から抜粋したものである。まず 3.1 で特徴描写 TE を取り上げ、3.2 で特徴描写 TE 以外の TE の例を取り上げる。3.3 で両者の共通する特徴とその理論的な含意について議論す

る。

3.1 特徴描写 TE の場合

ここからは、先行文脈も含めた特徴描写 TE の実例を確認する。まず (14) を見る。

(14) He wasn't a large man. He didn't look particularly threatening. But even that single movement, the way he got to his feet, gave me pause for thought. He had the same silken quality as a panther or a leopard, and there was a strange malevolence in his eyes—they were a soft brown—that seemed to challenge, even to threaten, me. (*The Word is Murder*; 下線は筆者による)

下線部の特徴描写 TE は、pivot (=a strange malevolence that seemed to challenge, even to threaten, me) が coda NP (=his eyes) の特徴を描写していることが分かる。この TE が先の (10a) や (10b) のように文脈から切り離されていたなら、これで分析は終わるところである。しかし (14) のように先行文脈を見ることで、TE の何文か前の時点からある男性 (he) についての人物描写が始まっており、TE は、他にも複数連ねられているこの人物の特徴描写のうちの一つとして使用されていることが分かる。つまりこの特徴描写 TE には、この文自体の中に特徴の描写対象 (his eyes) と特徴描写を含むのと同時に、この文そのものが、先行文脈で確立した談話トピック (he) についての特徴描写の機能も担っているという、いわば二重の特徴描写が成立している。尚、言うまでもなく、TE が談話トピックとなっている男性の特徴描写であることは、coda NP に含まれる代名詞 (his) とトピックの間の照応関係が成立することによってはじめて可能となっている。

同様の観点から、(15) を検討してみよう。

(15) She was a short, very business-like woman: there was a sense

of determination in her eyes, her sharply cut hair, the way she walked. If I saw her coming, your first instinct would be to step aside and let her pass. And yet there was nothing unkind about her. She was in her sixties with a pleasant, round face. (*The Word is Murder*; 下線は筆者による)

(14)の場合と同様、最初の TE (= there was a sense of…) に先行する文の主語である女性 (she) が談話トピックとして立ち上がった後、同じ文の述語 (=was a short, very business-like woman) でこの人物についての描写が始まり、直後の TE によってこの談話トピック (she) についてのさらに詳しい特徴描写が提示されている。この TE 自体の中に特徴描写対象 (in her eyes, her sharply cut hair, the way she walked) と特徴描写 (a sense of determination) が含まれるため、やはり特徴描写の二重構造が見られる。(15) が興味深いのは、同じ人物の描写で、別の TE (二番目の下線部) が用いられていることである。一つ目の TE とは異なり、この二番目の TE の codaNP の指示対象は談話トピックと同一であり、文レベルの特徴描写と談話トピックの特徴描写の対象が同一になっているため、特徴描写の二重構造は実質的には成立していない。しかし、二重構造の枠組み自体は (14) のそれと同じものである。

最後に、特徴描写 TE の情報構造について示唆的な事例 (16) を見る。

(16) Built like a rugby player, with his broken nose, lank hair and cheap suit, Meadows didn't look anything like the usual sort of person who drank at the Groucho. Like Hawthorne, there was something undefinably threatening about him.

(*The Word is Murder*; 下線は筆者による)

(14)(15) と同じく、TE に先行して特定の人物 (Meadows) の描写が始まっている。注目すべきなのは、TE の前に付された like Hawthorne という句である。これを伴うことにより、(16) の TE は、目下描写している人物 (Meadows) と

は別の人物（Hawthorne）とを引き合いに出して比較し、両者の類似性を表現している。これが可能であるということは、この TE の機能が pivot の導入（提示的機能）ではなく、談話トピックとなっている指示対象の特徴描写であることを示唆している。このように、(16) の TE は pivot の所在についての情報を伝達しているのではなく、coda NP が pivot の指す属性を備えているという事実を伝達しているのである。

3.2 特徴描写 TE 以外の TE (pivot = 個体)

次に、pivot が個体 (individual) を指すという点で特徴描写 TE とは一見異なるタイプの TE の実例を見てみよう。

(17) The office was as unremarkable as the rest of the building, with a desk and a collection of very utilitarian chairs—padded without being remotely comfortable. A coffee machine stood on a trestle table to one side. There was a calendar on the wall. (*The Word is Murder*; 下線は筆者による)

(17) の下線部の TE は、pivot が coda NP (=the wall) の表す場所に存在している状況を描写している。特徴描写 TE とは異なり、通常は pivot が coda NP の特徴を描写していると解釈されない（カレンダーが掛かっていることが壁の特徴とは解釈されにくい）。この文を文脈から切り離せば、TE に関する先行研究で頻繁に引き合いに出されてきた一般的な TE の例文になる。しかし、(17) における TE は提示的 TE ではない。引用の冒頭文から分かるように、このパッセージは特定のオフィス (the office) の特徴の描写である。冒頭文の述語から描写は始まり、その後続く事務所の特徴を描写する 3 つの文の締め括りとして、この TE は用いられている。さらに言えば、この TE の文でこの段落が終わり、次の段落から話題は切り変わっている。

この時、coda NP (=the wall) の指示対象は、いわゆる間接照応のプロセスによって談話トピックと関連付けられる。オフィスには通常、壁があるからで

ある³。それゆえ Francez (2010) の分析にとっては、場所を表す非顕在項 (implicit location argument) がこの TE の分析にも必要かどうかということが問題になるかもしれない。だが本稿の分析にとって重要なのは、このような照応関係の成立過程よりも、この TE 文全体が談話トピックの指示対象 (the office) に関する一連の描写の一部を成しているという事実の方である。この観点に立つと、(17) の TE は、実は 3.1 で見た特徴描写 TE と並行的な現象であることが分かる。

次に、(18) を見てみよう。

(18) She lived in a smart, terraced house in Britannia Road just beyond the area of Chelsea that is known—appropriately, in her case—as World’s End. There were no CCTV cameras in the street, so there was no way of knowing who went in or left around the time of the murder. (*The Word is Murder*; 下線は筆者)

(18) の下線部の TE 自体が表す意味を考えると、(17) の TE に比べて pivot が coda NP の特徴を描写しているという解釈はしやすく、その意味で特徴描写 TE に近い性質を示すと言える。特に pivot が特徴描写 TE のように抽象名詞ではないにも関わらずそのような特徴描写の解釈がしやすくなるというのは、それ自体で興味深い現象である⁴。しかし、ここでは先行文脈との関係に注目する。まず、下線部の TE には coda (=in the street) が伴うため、pivot はこの coda の表す場所に位置づけられ、coda NP が、先行する談話トピック (Britannia Road) と間接照応のプロセスによって関連付けられる。そしてこの照応関係を土台とし、本節でこれまで見てきた例と同様、この TE の文全体で、道端に防犯カメラがないことを、談話トピック (Britannia Road) の特徴として描写している。

最後に、さらに複雑なプロセスが関与する例を見ておきたい。

(19) We went through the living area and down two steps to the study, which, with its wooden floor and minimal decoration, actually had the appearance of a conference room. There was no desk.

Instead, four white leather and steel chairs had been arranged around a glass table framed by bookshelves on one side and windows on the other. Another glass panel ran the full length of the ceiling, allowing the light to flood in. There were two cans of Coke on the table, one of them open. (*The Sentence is Death*; 下線は筆者による)

最初の TE (=There was no desk.) は、先行文脈に出てきた談話トピックの書斎 (the study) と間接的照応関係にある (Francez(2010) 流の分析では、両者は implicit location argument によって結びついている)。このため、机がないという状況はこの書斎の中で成り立っていることと解釈される。しかし、この TE の解釈の本質は、「机が不在である」という主張が成立する場所を特定することにあるのではなく、書斎の特徴を描写することにある。

次に 2 つ目の TE を見ると、この coda NP (=the table) は明らかに二文前の a glass table と直接的な照応関係にある。では、この場合の TE の機能はこのガラステーブルの特徴描写なのだろうか。実は、それだけではなく、この TE も一つ目の TE と同様、書斎の特徴描写の一部を成してもいる。このことは、談話内における特徴描写の成立と同一指示関係 (co-reference) の解決が必ずしも一対一対応しているわけではないことを物語っている。

3.3 TE の theticity 再考

本節では、便宜的に特徴描写 TE (3.1) とそれ以外の TE (3.2) に分け、小説からの実例を検討した。その結果、先行する談話トピックの特徴を描写するという機能は両者に共通しているということが判明した。TE の中での「coda NP = 特徴描写対象、pivot = 描写内容」という関係の成立の有無にかかわらず、3.1 と 3.2 で見た TE はすべて、文全体として談話トピックの特徴描写内容を表している点で同じである。談話トピックの概念タイプは、3.1 で見た実例はいずれも人であるのに対し、3.2 で見た例では場所であるが、この違いは 2 つのタイプの TE の差異を際立たせているというよりもむしろ、TE が共通して持つ

「談話トピックの特徴描写」という機能が「場所 (location)」の概念領域だけではなく人物描写の方にも適用されているという事実を示唆していると捉えるべきであろう⁵。このような共通性は、これら二種類の TE を（本稿の 1 節のように）先行文脈から切り離して単独で観察している限りは特定が困難なものである。そのような見方で分析を続ける限り、特徴描写 TE とその他（提示的 TE など）の相違点を指摘することに終始してしまうことになる⁶。

次に、特徴描写機能の性質について判断の種類の観点から再検討する。2 節で見たように、Lambrecht (1994) は、2 つの判断を文レベルの現象に反映されたものと見做し様々な文レベルの現象が categorical 文または thetic 文の特徴を有することを特定することに留まっていたため、TE の coda NP が示すトピック性が thetic 文としてのステータスには影響しないことの理由を説明する必要に迫られていたのであった。しかし、二種類の判断を文レベルに限定したものではなく、文を超えた談話のレベルにも反映されるべきものと考えれば、Lambrecht が直面したジレンマは解消される。thetic 文である TE が、談話トピックの指示対象に関する叙述を担う焦点 (focus) の役割を担うと捉えると、両者の間に文の境界をまたいだ談話レベルでの複合判断 (categorical judgment) が成立するからである。この対応関係を 3.2 の (17) を例に取って図式化すると、図 1 のようになる。

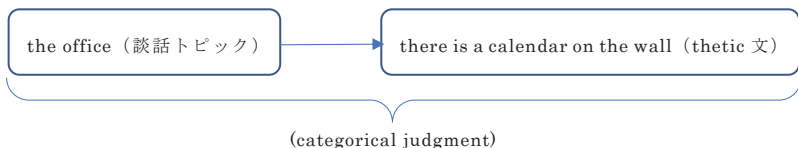


図 1 談話レベルにおける categorical judgment の例

このレベルでの theticity（単純判断性）を考えた場合、thetic 文の中に既知のステータスを与えられた、トピック性をもつ要素が含まれていても特に問題とはならない。それどころか、この categorical judgment は文をまたぐ関係の成立を前提とするものであるため、TE と談話トピックとの関係を示すために様々

な形の照応関係を用いて両者が関連付けられていることはむしろ自然なことになる。このように談話レベルの視点を取れば、coda に既知性を伴う要素（代名詞や定記述）が用いられることは特に問題ではなくなる。

特徴描写 TE を *thetic* 文に分類することの妥当性に関する理論上の問題についてもまた、談話レベルの視点に立つことで解消されている。特徴描写 TE の機能は、coda NP の特徴描写ではなく、coda NP の特徴描写をその一部に含んだ、談話トピックの特徴描写である。つまり特徴描写 TE はその全体が談話トピックの特徴描写として機能し、文全体が焦点となる（Lambrecht の理論で言えば SF の文として機能する）という点において、TE が *thetic* 文であるという特徴づけには矛盾しない。このように、談話の展開という視点を取れば、特徴描写 TE は TE という構文カテゴリーの中で決して特異な存在ではないことが分かる。「coda NP の特徴描写をしているのにもかかわらず *thetic* 文（SF の構文）で表現されていることは奇妙である」というのは、(6) のように TE のみを文脈から切り離し、その構成要素だけを見ていたことによって生じる問題だったわけである。

上記の議論は、当然のことながら「*categorical* 文（PF 構造の文）もまた、談話トピックの指示対象の特徴描写内容を伝達する焦点（SF の文）として機能するのか」という問いを生む。これに対する答えは YES であると思われる。ただし、*categorical* 文の場合はトピック性の高い主語の位置に名詞句が置かれるため、それが談話トピックと何らかの形で照応関係にない場合、この位置の名詞句が新たな談話トピックの地位に取って代わる可能性が TE の場合よりも高くなるという違いがあると考えられる。TE のようにトピック性の高い主語位置に虚辞を置いて「空いた」状態にしている *thetic* 文に比べ、*categorical* 文は本質的に、純粹に談話トピックの特徴描写だけで終わりにくい構造をしている。この点で、*categorical* 文は図 1 のような談話レベルの *theticity* を帯びることはありうるが、*thetic* 文に比べるとその典型性は低いことが予測できる。ただし、これは現時点ではあくまでも理論上の予測であり、別途検証する必要がある。

本節の締め括りとして、*thetic* 文に関する先行研究における本研究の位置づけについて触れておきたい。存在文を含めた *thetic* 文についての包括的な議論を展開した García Macías (2016: 55) は、存在文 (*existentials*) は提示文

(presentatives) とは異質のものであり、両者の機能は必ずしも一致しないことを強調している。これは、TE の機能は提示機能だけに限らないとする本稿の立場と軌を一にする。その他の機能として挙げられるものの中で、本稿で指摘した談話トピックの特徴描写機能に比較的近いのは Sasse (2006: 286) が thetic 文の担いうる機能の一つとして挙げる背景描写 (background descriptions) であると思われる。これは、その名の通り背景の描写や場面設定のために使われることを指すが、この分類で想定されているのは (英語であれば) *DOGS were running in the yard.* のように出来事・状況を描写する自動詞文である。しかし「描写」機能ではある点、および「背景」の描写のために前景が必要であること、すなわちコンテキストを必要とするという点は本稿が注目してきたタイプの TE と共通している。これに関連して、García Macías (2016) は、theticity という概念が文レベルのものなのか談話領域に属すべきものなのか、という問いについては基本的には前者の立場を取りながらも、背景描写機能だけは談話レベルで捉えるべきものであることに言及している (García Macías 2016: 52)。以上のことを踏まえると、談話トピックの特徴描写を「背景」の描写にカテゴライズできるかという細かな問題はともかく、本稿の立場は theticity が談話レベルに属する概念とする分析を支持する事例研究と位置付けることができるだろう⁷。

4. 結論

本稿は、pivot が coda NP の特徴を描写する特徴描写 TE の存在が文レベルの情報構造を基盤として TE を thetic 文とする Lambrecht (1994, 2000) の説にとって問題となることを出発点とし、特徴描写 TE を含めた TE の分析には談話の先行文脈を射程に入れることの重要性を指摘した。その根拠として、特徴描写 TE は coda NP の特徴を pivot が描写するという文内での特徴描写だけではなく、文全体が先行する談話トピックの特徴を描写する機能も担っていること、そしてこの談話トピックの特徴描写という文機能が個体の所在を表すタイプの (より一般的な) TE にも観察できることを事例と共に示した。最後に、本分析が、単純判断と複合判断の概念が文レベルだけではなく談話レベルにも関わるといふ見方を支持することを論じた。

以下では、本稿で扱いきれなかった問題について述べておく。一つ目は、提示的機能と特徴描写機能の関係である。後者は後続文脈につながる機能であり、前者は先行文脈に密接に関わるということを考えると、その性質は大きく異なるように思われるが、両者は必ずしも相互排他的なものとは限らない。特徴描写 TE が談話トピックの特徴を描写すると同時にその pivot を成す抽象名詞が後続文脈のトピックとなる状況は、論理的には想定可能である。とはいえ、聞き手の処理負担なども考えると、2つの機能を同時に担う事例は比較的少ないことも予想できる。今後のさらなる研究が待たれる問題である。

もう一つの問題は、TE のその他の多様な意味機能との関連である。TE は、本論文の例文 (3) のように、特定の存在物の特徴描写ではなく、事象・状況を描写する機能を担うこともある。Erstesich-Shir (1997, 2007) が導入している場面トピック (stage topic) という概念は、この類の TE の意味の解釈プロセスを分析する試みであると言える。場面トピックは、広義に解釈すれば、先行文脈との関係を捉えようとしているという点で本稿における分析と共通する部分があるが、ここで想定されているのは、いわゆる場面レベル (stage-level) 述語に共通する、時空間を特定する事象項 (event argument) に相当するものである。つまり Erstesich-Shir は暗黙裡に「thetic 文は、場面レベルの描写文である」という仮定を採用していると推定できる。しかし、3.1 や 3.2 で取り上げた TE は、いわゆる場面レベル述語文としての性質よりもむしろ個体レベル (individual-level) 述語文に近いものである。本稿で取り上げた特徴描写機能との関係については、果たして TE の分析にこの種の述語の二分法がそもそも有効なのかという点も含め、さらに検討の余地がある。

本稿では、コンテキストを含めて機能を分析した時に、単文レベルでの観察ではかなり異質に見える TE の間に機能上の共通性を見出すことができることを示した。TE は、情報構造を構成する構文 (information packaging constructions) の一種に数えられることも多いが (Huddleston and Pullum 2002)、実際には事態描写の側面も兼ね備えており、一筋縄にはいかない性質を持っている⁸。本稿で示した分析の方針がこの複雑極まる TE という現象の全体像の解明に少なからず貢献することを期待したい。

謝辞

本論文の内容について建設的なコメントを頂戴した2名の査読者に御礼を申し上げます。本論文の基盤となる部分は、2022年度後期から2024年度前期にかけて本学大学院で開講した情報構造に関する講義・演習を通じて形作られたものである。この間のすべての受講生に謝意を表したい。本研究はJSPS科研費（課題番号：19K00697）の援助を受けて行われた。尚、本稿の不備はすべて筆者の責任によるものである。

注

- 1 本論文ではTEが常に照応的であると主張しているわけではなく、照応性を示さないタイプの存在文もちろんある。例えば、現実的な可能性は低いが、仮に(12)や(13)のTEが照応的ではなく総称的に解釈された場合、Koch (2012)の分類でいえば、総称的存在 (generic existence) を表すタイプの存在文ということになる。
- 2 否定と疑問文が提示機能と相性が悪いことについては先行研究でも指摘がある (García Macías 2016: 54-55)。
- 3 間接照応は、“bridging” (Clark and Haviland 1977) や “inferrables” (Prince 1981) と呼ばれる。
- 4 pivotの名詞に量化詞noが伴うことがこの特徴描写解釈に貢献している可能性もあるが、本論文の目的からは外れるテーマなので、ここでこれ以上は追究しない。
- 5 査読者の一人から、「場所－存在物」の関係から「人物－属性」の関係への概念メタファーに基づく意味拡張プロセスの存在についての示唆があった。この指摘そのものは妥当であると思われる。本稿での分析がもし正しいとすれば、そのメタファー的な拡張は文レベルの意味を基盤にして生じたのではなく、談話トピックの特徴描写をおこなうという談話レベルでの機能的な要請によって動機づけられたものの可能性もある。すなわち、2つの関係の類似性を見出すための動機として、文レベルでは特に特徴描写を担わないタイプTEが談話トピックの特徴描写機能を担う文脈で使用されることにより、文レベルでも特徴描写をおこなうTEにも拡張していく、というシナリオが想定できるのである。これは、談話内での様々なレベルのやりとりで意味変化の駆動力を見出すという観点に立った仮説である (cf. Traugott and Dasher 2002)。

- 6 そのような分析の一例が Minami (2020) にある。
- 7 存在文 (existential sentences)、とりわけ英語の TE が thetic 文の中でも特異な地位にあることについては Croft (2022: Chapter 11) も参照。
- 8 南 (2024 年刊行予定) は、TE が示すこのような機能上の特殊性に対して認知的構文文法 (Cognitive Construction Grammar) の観点から論じている。

文献

- Abbott, Barbara (1993) “A pragmatic account of the definiteness effect in existential sentences.” *Journal of Pragmatics* 19, 39-55.
- Anderson, John M. (1971) *The grammar of case: Toward a localistic theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Birner J., Betty and Gregory Ward (1998) *Information status and noncanonical word order in English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Clark, Herbert H. and Susan E. Haviland (1977) “Comprehension and the given-new contract.” In Roy O. Freedle (ed.) *Discourse production and comprehension*, 1-40, Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Croft, William (2022) *Morphosyntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Erteschik-Shir, Nomi (1997) *The dynamics of focus structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information structure: The syntax-discourse interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Francez, Itamar (2010) “Context dependence and implicit arguments in existentials.” *Linguistics and Philosophy* 33, 11-30.
- García Macías, José Hugo (2016) *From the unexpected to the unbelievable: thetics, miratives and exclamatives in conceptual space*. Ph. D. dissertation, University of New Mexico.
- Givón, Talmy (1983) “Topic continuity in discourse: An introduction.” In Talmy Givón (ed.) *Topic continuity in discourse*, 1-41, Amsterdam: John Benjamins.
- Hannay, Michael (1985) *English existentials in Functional Grammar*. Foris,

Dordrecht.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Irwin, Patricia (2018) “Existential unaccusativity and new discourse referents.” *Glossa: a journal of general linguistics* 3(1): X, 1-42.

金口義明 (1968) 『主題と陳述 (上)』 東京：研究社.

Koch, Peter (2012) “Location, existence, and possession: A constructional-typological exploration.” *Linguistics* 50(3), 533-603.

Kuroda, S.-Y. (1972) “The categorical and the thetic judgment: Evidence from Japanese.” *Foundations of Language* 9, 153-185.

Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: Chicago University Press.

Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge University Press, Cambridge.

Lambrecht, Knud (2000) “When subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in Sentence-Focus constructions across languages.” *Studies in Language* 24(3), 611-682.

McNally, Louise (2011) “Existential sentences.” In Klaus von Stechow, Claudia Maienborn and Paul Portner (eds.) *Semantics: An international handbook of natural language meaning, Vol. 2*, pp. 1829-1848, The Hague: de Gruyter.

Milsark, Gary (1974) *Existential sentences in English*. Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]

Minami, Yusuke (2020) “Abstract nouns in the *there/have* alternation: A preliminary study.” *Bulletin of the Faculty of Literature, Kobe Women’s University* vol. 53, 11-23.

南佑亮 (2024 年刊行予定) 「情報構造と事態把握—there 存在文が示す 2 つの機能的側面をめぐる構文文法的試論—」『認知言語学論考 No. 18』.

Partee, Barbara H. and Vladimir Borschev (2004) “The semantics of Russian genitive of negation: The nature and role of perspectival structure.” In Robert B. Young (ed.),

Proceedings from SALT XIV, 212-234, Ithaca, NY: CLC Publications.

Prince, Ellen F. (1981) "Toward a taxonomy of given-new information." In Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, 223-256, New York: Academic Press.

Rando, Emily and Donna J. Napoli (1978) "Definites in *there*-sentences." *Language* 54(2), 300-313.

Sasse, Hans-Jürgen (1987) "The thetic/categorical judgment revisited." *Linguistics* 25, 511-580.

Sasse, Hans-Jürgen (2006) "Theticity." In Giuliano Bernini and Marcia L. Schwarz (eds.) *Pragmatic organization of discourse in languages of Europe*, 255-308, Berlin: Mouton de Gruyter.

Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in semantic change*. Cambridge: Cambridge University Press.

一次資料

Horowitz, Anthony (2017) *The Word is Murder*. Century.

Horowitz, Anthony (2018) *The Sentence is Death*. Century.

On the Descriptive Function of *There*-Existentials

Yusuke MINAMI

It has been widely acknowledged in the literature that the English *there*-existentials (e.g. *There are apples on the table.*) have the presentational function of introducing a new referent into the discourse. This has led some researchers to claim that its syntactic peculiarity is best analyzed as constituting the “sentence focus” structure reflectingthetic judgment, which is paradigmatically contrasted with the canonical subject-predicate (“predicate focus”) structure representing categorical judgment. This analysis, however, fails to capture a certain class of *there* existential sentences (e.g. *There is a depth in her voice.*) because their semantics inherently involves the function of property description, which theoretically should be encoded through the unmarked subject-predicate grammatical structure rather than the marked sentence focus structure. The present paper will argue that this problem should be resolved by examining naturally occurring examples together with their preceding linguistic contexts. Specifically, it will be shown that certain attested examples of *there*-existential sentences, including not only ones belonging to the above-mentioned apparently exceptional category but also ones of a more ordinary kind (e.g. *There’s a picture on the wall.*), share the function of describing the referent which is established as the discourse topic. It will then be discussed that the proposed analysis suggests the possibility that the relevance of thethetic/categorical distinction to linguistic phenomena is not sentence-oriented but discourse-oriented.

Keywords : *there*-existentials,thetic/categorical judgment, presentational function, descriptive function, discourse level vs. sentence level

キーワード : there 存在文、単純判断・複合判断、提示的機能、特徴描写、談話レベルと文レベル